公益財団法人

日韓文化交流基金 NEWS

https://www.jkcf.or.jp
2023.1.30　No. 99

CONTENTS

1　フォローアップ事業
JENESYS2022日韓次世代会議開催
2　新任のご挨拶
3-4　青少年交流
コロナ禍を乗り越えて
―2022年９月　オフライン訪日／訪韓事業再始動―
フォローアップ事業　第1回JENESYS参加者対象同窓会
「JENESYS同窓人の夕べ」
5　活動報告
JKAF（Japan Korea Alumni Forum）
訪韓団OBOG組織
6-7　助成事業紹介
「第30回ASSITEJ（アシテジ）
韓国国際サマーフェスティバル」招聘公演
「日韓オンラインリーディングワークショップ」を行って
8-9　会議事業
特別寄稿　COVID-19のレッスン―記録と記憶を残す
第22回日韓歴史家会議「歴史研究の三分法をめぐって
―過去・現在・未来」
10-11 フェロー研究紹介
韓流エンタメの強さ　知りたくて
12　事業報告
13-14 退任のご挨拶

公益財団法人 日韓文化交流基金
〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2
プライム水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790
fax. 03-6261-6780

Web　Facebook　Twitter

フォローアップ事業

JENESYS2022 日韓次世代会議開催

「対日理解促進交流プログラム（JENESYS）」事業では、事業に参加した同窓生の皆さんが互いの国や日韓交流に関する関心を持ち続け、参加経験を生かした活動を行うことを目指しています。この活動を後押しするフォローアップ事業として、2022年12月17日に「JENESYS2022日韓次世代会議」を開催しました。

JENESYSアルムナイ組織Japan-Korea Alumni Forum（JKAF）とKorea-Japan Alumni Forum（KJAF）の協力を経て実現したこの取り組みは、日韓両国のメンバーが集まる東京・ソウルの各会場とその他の地域をオンラインで結び、メインテーマ「ライフステージ」の下、3つのチームが3か月にわたって取り組んだ活動の成果と、それらをまとめた提言の発表を行いました。

＜1. 教育チーム＞

「日本と韓国の青少年期英語教育改善策：会話能力育成を中心に」をテーマに、①学習者の興味と水準を考慮したコンテンツを活用する教育方法や、②多様な教授方法を活用して持続的に英語に接することができる環境を整え、双方向のコミュニケーションを通じて学習者が体得していく方法について提案しました。

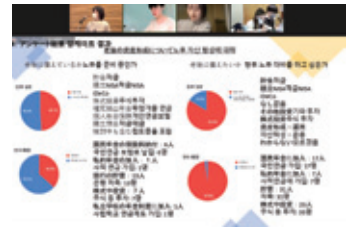
＜2. 労働チーム＞

「否定的社内文化調査を通した望ましい労働の提示－上司との問題を中心に」をテーマに、①社内の水平的な雰囲気づくり、②上司評価システム等に見られる権威的な構造改革、③組織内上層部の意識改革の3点を提案しました。

＜3. 老後・福祉チーム＞

「年金制度～日本・韓国の若者の意識の違いとは～」をテーマに、①若者自身が将来に対して感じる不安を払拭すべく学び策を講じること、②年金制度に関する有識者会議で若者を交えて議論するなど、定期的に若者の声を届ける仕組みづくりについて提案しました。

提言の詳細は当基金のウェブサイトで公開しています。
また、5ページに、JKAFメンバーによる9月から11月までの準備会合についてご紹介していますので、あわせて御覧下さい。



新任のご挨拶

公益財団法人日韓文化交流基金
会長

古賀 信行

昨年11月1日付で日韓文化交流基金会長に就任いたしました古賀信行でございます。

私はこれまで長く経済界に身を置いてまいりましたが、今回初めて、文化分野の仕事に携わることになりました。足りない点も多々あるかと思いますが、関係の皆様からのご指導ご鞭撻を賜りつつ、力を尽くしてまいる所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私はビジネスの世界で30年以上にわたり韓国との関わりを持ってきましたが、その中で感じましたのは、交流は継続することが大切だ、ということです。

異なる文化を持つ人々と会い、相手を知り、理解を深める。一度だけの出会いでは難しいことです。繰り返し出会って、時には議論を重ねてこそ、相手の考え方を知り、理解を進めることが出来ると思います。

経済界においては、日韓両国間での交流・協力は勿論、第三国において日韓が共同で進めてきたプロジェクトも多数ございます。

また、近年の文化における両国国民間の相互理解と共感の進展には目覚ましいものがあります。

政治・外交の側面では、両国間に様々な課題が存在しますが、このような相互協力・相互理解の積み重ねが、日韓関係を下支えしている、とも言えるでしょう。

21世紀を迎えて既に4半世紀になろうとしていますが、日韓文化交流基金は「日韓両国国民間の人的交流及び学術・文化交流を増進し、相互理解と信頼関係を深めることによって、日韓両国の友好協力関係の発展とアジアの平和と安定に寄与する」という設立の目的をあらためて胸に刻み、時代の要請を踏まえつつ諸事業を進めてまいります。皆様からのご関心とご協力をよろしくお願いいたします。

プロフィール

こが　のぶゆき
古賀 信行

1974年 東京大学法学部卒業
野村證券株式会社（現、野村ホールディングス株式会社）入社
1995年 同　取締役
1999年 同　常務取締役
2000年 同　取締役副社長
2003年 同　取締役社長兼CEO
2011年 同　取締役会長
2020年 同　特別顧問
2022年 同　名誉顧問（現）
2014年～2018年
経団連　副会長
2018年～2022年
同　審議員会議長
2005年～
日韓経済協会副会長（現）

公益財団法人日韓文化交流基金
理事長

鹿取 克章

昨年９月１日、理事長に就任いたしました鹿取克章と申します。

私は、2000年から2002年、在韓国日本大使館に勤務しましたが、韓国に赴任し、地理、風土、文化、歴史、日韓関係など韓国に対する私の知識の不十分さを痛感しました。韓国を訪問したのも一度だけでしたし、言葉も話せません。私は、それまでドイツに３回勤務しましたが、欧州では国家間の交流が緊密で、近隣諸国を訪問し、近隣諸国で学ぶことは日常茶飯事です。言葉もお互いに勉強しています。お互いに対する理解及び親近感が強く感じられます。韓国で生活し、私は、韓国のことをもっと知り、交流を強化したいとの強い問題意識を持ちました。

幸い、日韓関係は明るい方向に進んでいました。1998年の日韓共同宣言、金大中（キム・デジュン）大統領の日本の大衆文化の段階的開放、サッカー・ワールドカップ共同開催、日本における韓国ドラマの大きな成功などにより、両国国民の心は急速に近づきました。羽田・金浦間のシャトル便の導入や観光ヴィザ撤廃により、人的交流も年々拡大し、2018年には特に韓国からの訪問者の増大により1000万人の大台を越えました。しかしながら、現在、関係は冷え込んでいます。人的交流も、反発と不信感が草の根レベルにまで広がった結果著しく縮小し、コロナが追い打ちをかけています。

日本と朝鮮半島との間では古代から様々な交流が行われてきました。私は、韓国に滞在し、韓国は日本にとって長い交流に裏付けられた特別なパートナーであると感じました。緊密な日韓友好協力関係は、東アジアの平和と安定の礎でもあります。関係の安定的な基盤を確立することは、日韓両国にとって喫緊の課題です。

鍵は、やはり相互理解の一層の増進です。特に、市民及び青少年の交流を続けていくことが重要です。感染症の動向は依然不透明ですが、私は、基金がこれまで取り組んできた青少年交流をはじめ様々な地道な努力を鋭意継続し、韓国との友情及び相互信頼関係を育んでいきたいと考えています。今後とも、皆様の温かいご支援及びご鞭撻をいただければ大変幸いです。

プロフィール

かとり　よしのり
鹿取 克章

1973年 一橋大学経済学部卒業
外務省入省
1997年 在ミュンヘン総領事
2000年 在韓国大使館総括公使
2003年 領事移住部長
2004年 領事局長
2005年 外務報道官
2006年 駐イスラエル大使
2011年 駐インドネシア大使
2014年 退官、外務省参与
（査察担当）

コロナ禍を乗り越えて
ー2022年９月　オフライン訪日／訪韓事業再始動ー

新型コロナウイルス感染拡大により中断していた対面形式での青少年交流事業を約３年ぶりに実施しました。

在韓公館選抜韓国青年訪日団（第１団）	大学生訪韓団
9月23日～29日	
社会人・大学生17名	大学生等23名
外務省表敬、京都府京丹後市訪問（市長表敬、京都府立丹後緑風高等学校訪問、東京オリンピック・パラリンピック韓国ホストタウン関連施設視察）、JKAF（大学生訪韓団同窓組織）との交流、東京オリパラ関連施設視察など	韓国外交部・在韓国日本大使館公報文化院表敬、高麗大学グローバル日本研究院訪問、「日韓交流おまつり　in Seoul」参加（ブース運営）、大学生訪日団メンバーとのフィールドワークなど

参加者の感想より（抜粋）

在韓公館選抜韓国青年訪日団（第１団）

・最も印象に残っているのは、「東京オリンピック・パラリンピック」が開催された国立競技場と日本オリンピックミュージアムです。2022年の視点から、コロナを克服して開催された大会の感動を新たに感じ、ポスト・コロナ時代を迎える日本の様子を学ぶことができました。

中山泰　京丹後市長を表敬

・各種の視察や講義などを通じて広い意味での日韓関係（国家と国家）、また同世代交流を通じて狭い意味での日韓関係（個人と個人）について、大いに学ぶ機会となりました。未来を担っていく若い世代として、日韓関係をいかに認識し、築いていけばいいのかという問いに対する回答を得ることができた、非常に貴重な時間になりました。

・京丹後市にはこれまで馴染みがありませんでしたが、訪問してその魅力を存分に感じることができました。カヌーを通じて韓国との交流があることも初めて知り、また地元の高校生との交流を通じて、日本の若者がいかに韓国への関心が高く、交流を願っているのかを感じることができ、とても光栄に思いました。過去は変えられませんが、未来はいくらでも変えることができます。自分も含め日韓の若い世代には、両国の歴史にとらわれず、未来を切り拓いてほしいと思います。

京都府立丹後緑風高校の生徒の皆さんとの交流

関係者コメント

京都府　京丹後市教育委員会事務局
田中屋敷 和之さん

これまでのカヌー交流やホストタウンの取り組みなどが実を結び、今回訪問いただいたことに心より感謝申し上げます。短い滞在でしたが、丹後緑風高校での生徒との交流では、同世代の人たちが、お互いの国の言葉で相手を思いやり、心を通わせる姿がとても感動的でした。今後も交流を続け理解を深められることを期待しています。

大学生訪韓団

・「日韓交流おまつり　in　Seoul」への参加で、今まで交流してきた同世代だけでなく、子どもからご高齢の方まで幅広い韓国市民の方々と直接交流することができ、また自分たちが準備段階から関わることで、日本文化を伝えることへの責任感を持って参加できた、貴重な経験になりました。外交部の訪問では、韓国政府側の見方はもちろん、外交官個人の考えもお伺いできて大変勉強になりました。印象に残った言葉がたくさんありました。

・「日韓交流おまつり　in　Seoul」に参加できたことが最も印象に残りました。日韓関係の悪化が報じられる中で、あれだけ幅広い年齢層、且つ多くのお客さんが私たちのブースに来てくれたのは思いもよらないことでした。私たち市民レベルでの交流が日韓の人と人との関係に深く寄与するものだと自覚することができました。

・外交部表敬の際のお話が大変印象に残りました。旅行では絶対に聞けないお話が聞けて、大変良い経験になりました。K-POPやドラマ、食べ物はきっかけに過ぎず、そこから歴史や政治について知ることで日韓の相互理解につながることに気付かされ、自身の知識不足を痛感するとともに勉学に励みたいと強く思いました。

日韓交流おまつり in Seoul で
水引の作り方を教える団員

日韓交流おまつり in Seoul で
来場者とカルタを楽しむ

フォローアップ事業
第１回JENESYS参加者対象同窓会「JENESYS同窓人の夕べ」

2022年８月26日に韓国・ソウルで在韓国日本大使館公報文化院の全面協力のもと、JENESYS参加者の同窓会「JENESYS同窓人の夕べ」を初めて開催しました。

巻頭でご紹介したとおり、「対日理解促進交流プログラム（JENESYS）」事業では参加経験者を対象としたフォローアップ事業に取り組んでおり、2022年度は「JENESYS2022日韓次世代会議」（12月17日実施）とあわせ、韓国で同窓会（全３回）を開催することになりました。

第１回同窓会は2019年度実施の在韓公館選抜大学生訪日団の参加者のうち、ソウルの日本大使館で選抜された参加者を中心に54名が集まってくれました。３年ぶりの再会を果たした参加者の皆さんは当時の思い出話に花を咲かせるとともに、日本や日韓交流への思いを新たにしていました。また、一行がホームステイを行った北海道と青森県の皆さんから送られた心のこもったメッセージ動画を紹介すると「ぜひ日本をまた訪問してホストファミリーの皆さんと再会したい」と感激していました。

一同が参加した訪日団では東日本大震災被災地域を中心に各地を訪問し、復興状況について理解を深めるための視察や講義を聴講しました。そのご縁もあり、同窓会当日は宮城県ソウル事務所の方をお招きし、宮城県が取り組む韓国との交流についてご紹介いただきました。他にも国際交流基金ソウル文化センターの担当者から韓国での事業をご紹介いただくなど、日本のさまざまな団体が韓国との交流に尽力していることを紹介しました。

参加者インタビュー

林奎炫（イム・ギュヒョン）さん
東国大学　国際通商学科

1. 同窓会に参加した感想

一緒に日本を訪問したメンバーと３年ぶりに再会することができ、とても嬉しかったです。当時は皆大学生でしたが、今は社会人となったメンバーも多くいました。久しぶりの再会であることを感じさせず、まるでその後もひんぱんに会っていたかのように親しく話す様子に「あの時一緒に笑い合ったメンバーに間違いない」と思いました。今後も時々このような機会があれば嬉しいです。

2. 同窓会をきっかけに取り組みたいこと

日韓交流という共通の関心を持つ者同士が集う場は大変有意義で楽しいものだと思いました。日韓両国民が民間または政府レベルで交流できる行事に積極的に参加したいです。また、両国がもっと良い関係に発展できるよう、JENESYSプログラムの経験者として力を尽くしたいと思っています。

再会を果たした同窓生たち

宮城県に関するプレゼンテーションを熱心に聞く同窓生たち

李御鎭（イ・オジン）さん
東亜放送芸術大学　映像制作科

1. 同窓会に参加した感想

訪日団以降、公式に当時のメンバーと一堂に会することができるとは思ってもいませんでした。久しぶりに会ったメンバーとともに日韓文化交流の場に集い、再び両国の文化交流について意見を交わすことのできる時間になったと思います。今は就職したメンバーもいてそれぞれ違う道を歩んでいますが、メンバーがそれぞれの場所で文化交流のための活動を続けていることがわかりました。当日、日本に関するさまざまな発表や資料に接することもでき、短い時間ではありましたが大変良い時間でした。

2. 同窓会をきっかけに取り組みたいこと

日韓交流について自分だけではなく、さまざまな人たちにもぜひ知ってほしいと思います。特に今のトレンドである多様な映像プラットホームを通した広報を通じ、さらに多くのさまざまな人たちに効果的な広報ができると思います。簡単なInstagramのリール機能を使用した短い動画制作から始め、機会があればドキュメンタリーや短編映画製作を通じて日韓関係に関して深く考え、誰でも関心を持つことができ、かつ楽しく接することができるようなコンテンツを作ってみたいと考えています。そしてオフラインでの日韓交流プログラムにも、より積極的に参加したいと思います。

JKAF（Japan Korea Alumni Forum）訪韓団OBOG組織

JKAF実行委員（社会人）　姜愛美

◎JENESYS2022日韓次世代会議 本会議に向けて

日韓両国のJENESYS事業の過去参加者を対象に12月17日に開催された「日韓次世代会議」では、大テーマ「ライフステージ」の下、小テーマ「教育」・「労働」・「老後・福祉」の日韓参加者混合の3グループで9月から3か月間にわたり会合を重ね、議論を成熟させました。月1回オンライン上で行った会合の様子について報告します。

＊会議の内容は1ページでご紹介しています。

第1回目（9月17日）の会合では、日韓両国チームメンバーの初めての顔合わせを行いました。JKAF・KJAF運営メンバーの紹介、メンバーの自己紹介から始まり、その後約1時間、チーム別に具体的なテーマや活動プラン作成に関する意見交換を行い、最後に話し合いの結果を発表しました。

例えば小テーマ「教育」のグループでは、教育の格差から日韓英語教育についての差異へと話が広がり、日韓両国ともに、長年学校で英語教育を受けているにも関わらず、実践に活かすことができていない状況などを話し合い、「英語教育、日韓英語教育の差異」を具体的なテーマに決定しました。

ほか、「労働」のグループでは「否定的組織文化に対する日韓での解決方法」を、「老後・福祉」のグループでは「年金問題」を具体的なテーマに決定しました。

第2回目（10月15日）の会合では、テーマの詳細や調査方法、役割分担などを決定しました。

各グループでは、両国の未来を担う日韓両国の若者を対象に、英語教育や社内文化、年金制度に関するインタビューやアンケート実施などの量的調査や質的調査を実施することにしました。

第3回目（11月19日）の会合では、労働社会学がご専門の関西学院大学社会学部 横田伸子教授の講義「ジェンダーの視点から見た韓国の労働改革」と質疑応答を通じ、さらに議論を深めることができました。また、テーマごとの進捗状況を共有し、相互にフィードバックを行いながら最終調整に向けて認識を共にしました。

こうした準備を重ね、満を持して当日を迎えることができ、学びの多い貴重な体験をすることが出来ました。

第1回目会合を終えて

◎3年ぶりのオフライン交流会開催 ～韓国青年訪日団（第1団）との交流

2022年9月24日から25日の2日間、韓国青年訪日団（第1団）団員17名とJKAFメンバーほか11名で、東京都内視察及び、交流会を実施しました。

初日はアイスブレイクの後、昨年の「東京オリンピック・パラリンピック」をテーマに、競技が行われた国立競技場を視察し、その後討論を行いました。

アイスブレイクでは、自己紹介をお互いの国の言語で行い、その後チーム別で「ワードウルフ」を行いました。「りんご」と告げられたチームの中でひとりだけ「梨」と告げられたメンバーを当てるゲームでは、1つの単語によってどのようなイメージを両文化が持っているかを知る機会となりました。

また国立競技場の視察では、展望デッキや関係者席などを見ながら、東京オリンピック・パラリンピック開催時に中継で見た競技などについて話し合いました。

討論では、「ポストコロナ禍における日韓の在り方」・「Z世代の私たちが日韓のためにできること」の2つのテーマについて、5つのチームに分かれて約1時間意見交換を行い、意見を模造紙にまとめ、発表しました。

発表では、コロナ前からコロナ禍、コロナ後の3つの期間において両国の関心事が、政治・歴史問題から韓国のドラマや食文化に変遷していることに着目し、今後政治・歴史問題の再燃が懸念される中でも、世間のムードに左右されることなく、それぞれが個人の興味を貫きながら発信していくことの重要性などについての意見が出ました。

2日目は、「日本の歴史的建造物の保存と復元、それらの利用法について」をテーマに、江戸たてもの園や小平ふるさと村を視察しました。

訪日団団員にとっては、日本の古い家屋やお店、電車等の展示が新鮮に感じられたようで、パンフレットや建物の前にある説明を翻訳機にかけて理解を深めていました。

また、小平ふるさと村では日本のけん玉などの昔懐かしい遊びが体験でき、JKAFメンバーが訪日団メンバーに遊び方を教え、一緒に楽しむ姿が印象的でした。

今回は約3年ぶりの対面での交流が実現し、実際に会って交流ができることが貴重であると改めて感じました。また、討論などを通し、コロナ禍を経て社会経済状況が変わる中での日韓関係を改めて考え直す機会となりました。

討論で意見をまとめる日韓の参加者たち

助成事業紹介

「第30回ASSITEJ（アシテジ）韓国国際サマーフェスティバル」招聘公演

劇団かかし座　代表　**後藤 圭**

＊ASSITEJ（国際児童青少年舞台芸術協会）：児童青少年演劇の芸術水準の向上を目的とした個人・専門劇団・演劇団体のネットワーク。フランス発祥。

●パンデミックの中で

私たちの劇団かかし座は、主に2009年から海外での活動を始め、今回の世界的なパンデミックで中断を余儀なくされるまで11年間に世界13ヶ国39都市での公演を行ってきました。ところが2020年冬からのパンデミックによって、それ以後は海外での公演活動は全くできなくなってしまいました。あっという間に2年が経ち、国内での活動も激減して劇団としての活動も今後続けていくことができるのかどうか、という深刻な状態に陥ってしまったのです。そうした閉塞的な状況の中でも、私たちは少しでも劇団としての活動を取り戻すべく様々な取り組みをしてきました。「影絵女子」という女性4名の影絵チームの開始、インターネット配信の公演、YouTubeの独自チャンネルによる様々な影絵コンテンツの開発紹介、地元横浜の商店とのコラボレーションなども試みました。

●海外公演の復活

その中で少しでも早く復活したかったのが海外での公演活動です。海外での活動は国内では経験できない貴重な体験を得ることができます。言葉の壁を超えて様々な国のお客様に接することは、私たちに様々な可能性を教えてくれます。ですからアシテジ韓国センターから昨夏の国際フェスティバルへの招待をいただいたのはとても嬉しいことだったのですが、アシテジ韓国もやはりパンデミックの影響で十分な予算を準備することは難しいとのこと。日本でも1ヶ国のみでの公演に助成金を得ることはなかなか難しいのが現状です。そこで大変ありがたかったのが、日韓文化交流基金の助成制度です。助成申請が通ったという知らせは私たちにとても勇気を与えてくれました。

●公演の準備

昨年は5月にもEUでの公演が実現していましたが、韓国は私たちの海外公演の中でもとても重要な位置を占めています。今までの公演回数も一番多く、近年は韓国の劇団とコラボ作品を作っています。ここでうっかりしたのですが、韓国は行き慣れていた分いつもと同じ準備で良いと何となく思ってしまっていたのです。渡航にあたってPCRなどの検査をすることはわかっていたのですが、渡航予定の7月にはまだ感染対策でVISAが必要だったのです。慌てて申請をしたのですが、これが大変に混雑していていつ発給されるかわかりません。結局各方面にお願いをして、私たちが必要としていた短期就業VISA（C-4）が無事に取れたのは7月に入ってからでした。

●無事に公演！

いつもとはだいぶ違った様子の仁川空港での入国手続きも無事に済み、いよいよ公演です。京畿道南揚州市の公演が7月21日、ソウル・大学路のアルコ芸術劇場大ホールでの公演は23～24日です。全部で3日間6ステージでした。韓国の皆さんの反応はいつも大きくてはっきりしています。どの公演でもとても大きく温かい拍手をいただきました。「ああ、韓国のお客様だな。」3年近くの間遠ざかっていた韓国のお客様に再会できた喜びをメンバー一同で噛み締めるひと時でした。韓国には3年間会えなかった友人や知人が沢山います。公演の合間に旧交を温め、再会を喜び合うこともできました。また、韓国の劇団Art Stage SANとのコラボ作品「るる島の冒険」も近々再演しようという約束もできました。1週間足らずの滞在でしたが、本当に中身の濃い、公演と交流ができました。

ソウル･アルコ芸術劇場での様子

●結びに

私は文化芸術というのは人間だけが作り出すことのできる最高のもの、良きものであると考えています。その良きものを軸に、世界の人々との交流をこれからも続けていきたいと念願しています。

そして今回のツアーを実現させるためにご尽力くださった日韓文化交流基金をはじめ、横浜の韓国総領事館の皆様、アシテジ韓国の皆様、ご来場くださったお客様の一人ひとりにも感謝を捧げたいと思います。ありがとうございました。

プロフィール

ご とう けい
後藤 圭

有限会社 劇団かかし座　代表取締役。
影絵美術家、演出家、プロデューサー。
（一社）アシテジ日本センター会長。
1955年東京生まれ。
1979年父・劇団かかし座創立者、後藤泰隆の急逝に伴い劇団かかし座後継者となる。
以来劇団の経営、創造活動両面のリーダーとして活躍。影絵劇、映像作品など影絵作品多数。厚生労働省社会保障審議会、日本視聴覚教育研究協会など受賞作品多数。

著書

「子どもに伝えたい伝承遊び　影絵」（文溪堂、2012年）
「手で遊ぶおもしろ影絵ブック」（PHP研究所、2005年）

「日韓オンラインリーディングワークショップ」を行って

一般社団法人フリンジシアターアソシエーション
井原 彩花

●行き来ができない間に、オンラインで交流を

私たちは、舞台芸術がもっと身近にある環境を築きたい、と考えて活動している団体です。その中で、色々な舞台芸術の公演や、芸術家によるワークショップなどを行ってきました。

2020年に、私たちの活動拠点である「アートコミュニティスペースKAIKA」で、日韓共同による演劇作品の創作に取り組みました。

京都を拠点に活動する「劇団衛星」が2004年から手がけている茶道演劇『珠光の庵』の韓国語版を、韓国から3人の俳優さんを京都にお招きし、創作しました。

次は韓国へ赴き、この作品の上演をと考えていたところで、コロナ禍に見舞われてしまいました。

当面、往来が叶わない中でもせめてオンラインで交流しつつ共に活動を続けたいと考えた私たちは、オンラインワークショップの実施を決めました。

「劇団衛星」をはじめとする京都の俳優と韓国の俳優がファシリテーターを務める形で、Zoomを利用したリーディングワークショップを行いました。

共同制作の公演時の出演者と

●2年間のオンラインワークショップ

2021年度はリーディングの題材に、日韓両国で馴染みのあるアンデルセン童話『マッチ売りの少女』を用いました。同じ童話を互いの国の言葉で読み、それぞれの言語の「音」の近い部分と異なる部分を感じたり、また原文に対する翻訳の違いからは、背景となる互いの文化の違いが見え隠れして、それを共有したりして楽しむことができました。

参加者は、それぞれの言語を学習している人も、全く初めて触れるという人もいましたが、「とても楽しかった」「言葉はわからなかったけど、意外とどの部分を読んでいるかわかって、面白かった」と、嬉しい感想を頂きました。

1年目の実施を終えた時に、次は互いの国の言葉を教えあったり、相手の言語で短い会話劇に挑戦してみるワークショップなどをやったりすると楽しいのではないか…と考えました。それぞれの言語に親しみを持つことができるのと同時に、文化の相違を楽しむことができそうだからです。

そこで翌年は、「言語」に焦点を当てたプログラムを計画しました。演劇が好きな人だけでなく、語学学習に関心のある人を対象に同様のワークショップができないか、と考えました。

外国語を学習する時には会話の例文を音読することがあります。私も最近、韓国語の勉強を始めたのですが、それは、演劇ワークショップにおける簡単な台本を読む行為にも似ているな、と思います。

オンラインワークショップの様子

舞台俳優のファシリテーションにより、日本語や韓国語の会話や短い文章を一緒に読めたら、より楽しく外国語を読むことができるだろう…と思ったのです。

ワークショップは語学学習ではないので正しい発音にばかりとらわれることなく、声に出すことができるのだろうと思います（これは演劇だから）。また、演劇の発表会ではないので、上手な演技でなくても台詞を読むことができるでしょう（外国語の台詞だから仕方ない）。正しい発音、上手な演技ができなくても許される場所で、気軽に、日本語・韓国語を声に出してみることを楽しもうとしました。

外国語は難しいと心配する人たちにも、「演劇」に参加するのは恥ずかしいと感じる人たちにも、それぞれ別の関心分野からこの感覚を実感してもらえるワークショップは、非常に楽しい時間になりました。

●これからの継続に向けて

このような試みは、これからも続けたいと考えています。ファシリテーターを務めた俳優たちも、参加してくれた参加者の方々も、「ぜひまたやりたい」と言ってくださっています。

これまでは年に2回程度の単発のイベントでしたが、数ヶ月ごとに行われる定期プログラムとして開催できれば、より多くの方にこの活動を知ってもらい、参加してもらえる機会も増えると考えています。

また、感染症が落ち着き、韓国と日本の往来も容易になったら、互いに訪問しつつ演劇公演やワークショップなどもやっていきたいです。

実際に行き来することができない期間が長くなったことで、結果的に日韓の俳優たちと長時間活動して、より深い繋がりを得ることができました。この関係を続けて、より多くの人たちとも繋がっていきたいと考えています。

両国の各地から集まった参加者

プロフィール

井原 彩花（いはら あやか）

舞台芸術の制作者。
幼少期から演じることや舞台に立つことに興味を持つ。中学から演劇を始め裏方に関心を持ち、瓜生山学園京都芸術大学（旧：京都造形芸術大学）で演劇について学ぶ。
卒業後は京都で舞台制作者として活動。2021年からフリンジシアターアソシエーションに所属。京都市の小中学校を中心に演劇的手法を使った体験型ワークショップのコーディネートなども行う。
現在、韓国での活動を視野に入れて韓国語を勉強中。

特別寄稿　COVID-19のレッスン―記録と記憶を残す

日韓歴史家会議運営委員会　日本側委員長　**飯島 渉**

日韓歴史家会議の日本側委員長で感染症の歴史がご専門の飯島渉先生に、コロナ禍における歴史家会議開催の意義についてご寄稿いただきました。

20年ほど続いてきた日韓歴史家会議も、2020年と2021年はいずれもリモート開催になりました。COVID-19のパンデミックの中でも、ICTの発達によって意見交換の機会が維持できたことはたいへん意義深いことでした。現在、リモート会議はごく当たり前のことになっています。技術自体はしばらく前から開発されていたのですが、COVID-19をきっかけとして一気にそれが広がったのです。

2021年の会議は、「伝染病と歴史」がテーマでした。COVID-19のパンデミックに触発されたものだったことは言うまでもありません。中世ヨーロッパの黒死病や19世紀のコレラ、風土病として日韓両国で流行したリンパ系フィラリア症などをとりあげ、COVID-19についても議論を深めました。感染症をめぐる記録や記憶を残すことの重要性も指摘されました。

大黒ふ頭のダイヤモンド・プリンセス号、乗客・乗員の下船後の様子
2020年３月９日筆者撮影

私たちは、ほぼ３年にわたってCOVID-19の影響のもとで生活を続けています。2020年の前半や2021年には日本でも緊急事態宣言が出され、行動の自粛が求められ、多くの人々がワクチン接種のための行列をつくりました。海外旅行はおろか県外への移動も少なくなり、行事の中止が相次ぎ、葬送の儀式もほとんどできなくなりました。影響があまりに大きかったので、私たちはそれを忘れることなどないと考えがちです。しかし、わずか数年前の出来事を思い出すことは意外に難しいのです。写真は、2020年２月、日本でのCOVID-19のはじまりを象徴する事件ともいえるダイヤモンド・プリンセス号です。当時、マスメディアはこの事件一色でした。しかし、その記録と記憶は残っているでしょうか。20世紀初期のインフルエンザ（スペイン風邪）は、数千万人の命を奪った大規模なパンデミックでした。しかし、いつのまにか忘れられてしまいました。日本の長崎県や韓国の済州島でリンパ系フィラリア症が流行し、その制圧のために日韓の研究者が協力して対策を進めたことも忘れられつつあります。

COVID-19は、社会の抱えるさまざまな矛盾や課題を表面化させ、視覚化させました。「感染症が世界をかえた」という言説も登場しました。それは私たちが感染症の衝撃によって、物事を冷静に判断することができなくなっていたからです。感染症それ自体が社会をかえることはあまりありません。社会の中に蓄積された矛盾が感染症を通じて顕在化するのです。COVID-19の影響が甚大だったのは、20世紀後半、感染症の制圧が進み、私たちは感染症で命を落とすことを意識できなくなっていたためです。そうした歴史の忘却ゆえに、COVID-19の出現の前でたじろぐことになったのです。

「歴史に学ぶことは難しい」と言わなければなりません。感染症が制圧されると、人々はそれを忘れたいと思いがちです。そのため、感染症の流行をめぐる記録と記憶を残すことは容易ではありません。With COVIDという感染症との「共生」や日常化が収束の姿だとすれば、いよいよ「感染症の歴史学」の出番だと言えるでしょう。しかし、「歴史に学ぶ」ための記録や記憶は急速に失われつつあります。いま求められているのは、COVID-19の記録と記憶を意図的に残すことです。2021年に日韓の歴史学者がリモート会議という形式で、COVID-19を論じたことも貴重な記録の一つと言えるでしょう。

プロフィール

いいじま わたる
飯島 渉

1960年生まれ。青山学院大学文学部教授。「感染症の歴史学」を専門とし、東アジアのペスト史やマラリア史を研究してきた。『感染症の中国史』（中公新書、2009年）、『感染症と私たちの歴史・これから』（清水書院、2018年）など。長崎大学熱帯医学研究所客員教授、獨協医科大学特任教授、目黒寄生虫館理事。感染症対策の資料を整理・保存する「感染症アーカイブズ」（https://aidh.jp/）の代表もつとめる。

第22回日韓歴史家会議
「歴史研究の三分法をめぐって―過去・現在・未来」

2022年11月19日、20日の2日間、対面とオンラインとのハイブリッド形式で、22回目となる日韓歴史家会議が開催されました。この会議は2001年に、日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」を設けることを目的として発足したものです。日本史、韓国史のみならず、ヨーロッパ史、アジア史など多様な分野を専門とする両国の歴史研究者が集い、最新の研究成果の報告とそれに基づく意見交換を行っています。

日韓の歴史学界は、自国史（日本史・韓国史）、東洋史、西洋史という領域区分によって研究を進めてきました。世界的にはこうした「三分法」はむしろ少数派で、自国史と世界史という区分などが普通です。今回の会議では、現在、こうしたパラダイムへの修正が求められている状況を、歴史学の動向や日韓の「東アジア」や「歴史総合」という歴史教育の課題から論じ、日本側12名、韓国側12名が出席しました。

「日韓歴史学界における自国史と世界史との関係」、「日韓歴史学界の『東洋史』研究と研究領域の空間」、「日韓歴史学界の『西洋史』研究と研究領域の空間」と題する3つのセッション別に日韓双方からの報告とこれに対する討論が行われ、活発な議論が交わされました。

初日の11月19日には記念講演会「歴史家の誕生」が開催され、信州大学特任教授の久保亨氏と、高麗大学名誉教授の金炅賢（キム・ギョンヒョン）氏が、歴史研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となった出来事などについてお話しされました。

講演会の内容を含む今回の会議の報告書は、3月までに当基金ウェブサイト上で公開の予定です。

第22回日韓歴史家会議「歴史研究の三分法をめぐって―過去・現在・未来」

■会議日程

◆11/19（土）

◇第 1 セッション
「日韓歴史学界における自国史と世界史との関係」
司会：小田中直樹（東北大）
報告：日本側／「日本研究か歴史学か― 19 世紀日本の『国史学』」
松沢裕作（慶應義塾大）
韓国側／「現代韓国における歴史学の制度的形成と日本の『3 分科』の定着を中心に」
辛珠柏（シン・ジュベク　韓国独立運動史研究所）
討論：日本側／伊藤俊介（福島大）
韓国側／方智姻（パン・ジウォン　慶北大）

◇第 2 セッション
「日韓歴史学界の『東洋史』研究と研究領域の空間」
司会：小田中直樹（東北大）
報告：日本側／「戦前期日本の東洋史学の思想性と無思想性」
吉澤誠一郎（東京大）
韓国側／「韓国における東洋史研究と研究領域の問題」
金衡鍾（キム・ヒョンジョン　ソウル大）
討論：日本側／飯島渉（青山学院大）
韓国側／朴薫（パク・フン　ソウル大）

◇第 3 セッション
「日韓歴史学界の『西洋史』研究と研究領域の空間」
司会：須田努（明治大）
報告：日本側／「日本の『西洋史学』と朝鮮統治―坂口昴（1872 ～ 1982）の場合」小山哲（京都大）
韓国側／「3分科体制解体以後の歴史学－グローバル韓国文明史と人新世 (Anthropocene) の歴史」
金基鳳（キム・ギボン　京畿大）
討論：日本側／小田原琳（東京外国語大）、韓国側
羅仁昊（ナ・インホ　大邱大）

◇日韓歴史家会議開催記念講演会
日本側／「現代中国史研究の転換期を生きて―新科目『歴史総合』創設にも触れながら」　久保亨（信州大特任教授）
韓国側／「歴史家の誕生」金炅賢（キム・ギョンヒョン　高麗大名誉教授）

◆11/20（日）

◇第 4 セッション　総合討論
司会：飯島渉（青山学院大）

■参加者名簿（日本側）　＊敬称略、五十音順

飯島 渉	青山学院大学	医療社会史
伊藤 俊介	福島大学	朝鮮近代史、近代日朝関係史
岩崎 稔	大和大学／東京外国語大学	政治哲学、政治思想史
小田中 直樹	東北大学大学院	フランス社会経済史、歴史関連諸科学
小田原 琳	東京外国語大学	ジェンダー史、西洋史
木畑 洋一	東京大学／成城大学	国際関係史
久保 亨	信州大学	中国近現代史
小山 哲	京都大学	ヨーロッパ史、ポーランド史
須田 努	明治大学	日本近世史・近代史
松沢 裕作	慶應義塾大学	近代日本史学史、近世・近代日本村落社会史
宮嶋 博史	成均館大学	朝鮮史
吉澤 誠一郎	東京大学	中国近代史

■参加者名簿（韓国側）　＊敬称略、カナダラ順

金炅賢	高麗大学	西洋古代史
金基鳳	京畿大学	史学史
金衡鍾	ソウル大学	中国近代史
羅仁昊	大邱大学	西洋現代史
都珍淳	昌原大学	韓国近現代史
朴檀	西江大学	ヨーロッパ現代史、フランス史
朴薫	ソウル大学	日本近代史
方智姻	慶北大学	歴史教育
裴京漢	釜山大学	中国近現代政治史、政治思想史
辛珠柏	韓国独立運動史研究所	韓国近現代史
林炳徹	韓国教員大学	西洋史
許芝銀	西江大学	日本近世史

フェロー研究紹介

韓流エンタメの強さ　知りたくて

朝日新聞記者　守 真弓

2021年度訪韓フェローの守真弓さんの研究報告を紹介します。

世界各地にK-POPブームを沸き起こしたボーイズグループ、BTS。非英語圏の作品として初めてエミー賞を受賞したドラマ、「イカゲーム」。アカデミー賞に輝いた映画、「パラサイト　半地下の家族」。すべてこの数年間で世界に広まった韓国のエンタテイメントだ。国際問題を扱う米国のデジタル誌「The Diplomat」は、中国のシルクロード経済圏構想「一帯一路」と対比した上で、「アジアで最も影響力を持ったソフトパワープロジェクトは、実際に文化的な吸引力を持つK-POPとそのファンダムだ」と指摘した。著名音楽プロデューサーの秋元康氏が、「国策だったというのが大きい」と語るなど、日本では、韓国エンタメの興隆は金大中（キム・デジュン）大統領時代から推し進めてきた文化政策によるものだとの論調が目立つ。だが、この成功は、「国策」だけがもたらしたものだろうか。また、どのような「国策」が奏功したのだろうか。そういった視点から、①国の取り組み②企業の取り組み③スターを支える「ファンダム」という３つの視点から、韓国文化の躍進の理由を考えてみた。

映画「パラサイト　半地下の家族」の撮影地にて

韓国政府の支援体制とは

まず、実際に韓国政府はどのような取り組みを行ってきたのか。①では韓国コンテンツ振興院（KOCCA）の李咏勲（イ・ヨンフン）日本ビジネスセンター長への取材を中心に、韓国政府が行ってきた海外進出支援や補助金支給の仕組みを調べた。

韓流ブームの初期から、韓国エンタメを日本に普及するための活動を担ってきた李センター長によると、KOCCAがK-POP歌手らを日本で披露するためのショーケースを初めて企画したのは2004年。渋谷の小さなライブハウスに日本のエンタメ業界関係者を招き、ロックバンド・紫雨林（ジャウリム）の歌手、キム・ユナさんらのステージを披露した。この時、日本事務所が捻出した予算は70万円。この時の反応に手応えを感じ、その翌年には、約１千万円規模の予算で人気バンドBUZZなどの公演を行った。最大の予算を使ったのが、2010年に東京国際フォーラムのホールAで行った公演（K-POP NIGHT IN JAPAN）で、韓国の本部から計１億円を支出したという。

だが、この間、SMエンタテイメントやＹＧエンタテイメントといった大手音楽事務所は、KOCCAの取り組みをはるかに超える規模で独自に日本展開を進め、BIGBANGや少女時代を次々とヒットさせていた。李センター長は、韓流ブームにKOCCAが果たした功績は限定的だったと指摘。むしろ、KOCCAの企画するイベントに比較的安い出演料でスターに出演してもらうなど、「KOCCAは、大手芸能事務所に助けてもらう側だった」という。

一方、KOCCAが支援に力を入れたのは、まだ力のない中小のエンタメ企業への支援だった。録音スタジオや巨大な室内撮影スタジオを建設し、中小企業には特に安く貸し出した。また、ドキュメンタリー作品やテレビドラマなど、放送作品に対し、きめ細やかに補助金を支出しているが、大手企業がこうした補助金を申請しても、通常は審査の段階で認めない。「政府がやるべきなのは、自力でいくらでも成長できる大企業ではなく、わずかな支援でも本当に必要としているところにきめ細やかに届けること。それによって健全な競争が確保され、業界全体のレベルが上がっていく」と李センター長は言う。

日本政府にも、エンタメ産業への補助事業はある。例えば、経済産業省が映像産業振興機構を通じて「日本発のコンテンツ等の海外展開を促進」することなどを目的に行って

いる、「J-LOD」は、令和3年度補正予算では、KOCCAの年間予算を超える557億円が投入されている大型の補助事業だ。だが、2019年2月からの1年間に同補助金の交付を受けた事業者一覧をみると、電通や博報堂、日清食品、日本唐揚協会など、超大企業や直接コンテンツ制作とは関係のない団体の名前が並び、韓国と日本の「文化政策」の軸足の違いが垣間見える。

また、直接、エンタメ産業のためにとられた政策ではなかったものの、金大中大統領時代に進めた通信環境の改善は、SNSを通じたプロモーションがコンテンツ産業の要となった現代において、Kコンテンツの世界的な普及に大きな役割を果たした「国策」だった。

「企画社」の企業努力

②では韓国の民間企業がどのように海外進出を進めたのか、経緯を追った。K-POPに関して、大きな役割を果たしたのは、「企画社」と呼ばれる芸能音楽事務所だ。中でも、90年代から日本進出を目指したSMは、日本のアイドル養成制度を参考にしつつ、スターの素質のある若者をみつけて徹底的に音楽やダンスを教え込み、スターを生み出す練習生制度を確立。10代の若者に対して精神的・肉体的な負担をかけるといった問題点を含みながらも、「児童労働に関連する法律が厳しく、厳しいレッスンが認められない欧米などでは達成できない高いレベルのパフォーマンスが実現した」。韓流文化を海外に広める上では、中堅財閥のCJグループも大きな役割を果たした。韓国映画の「ゴッドマザー」と呼ばれるCJグループのイ・ミギョン副会長は、良質な映画やドラマの制作だけではなく、BTSの米国人気の弾みとなったKCONの開催などを通じて、K-POPの海外進出も助けた。

現代経済研究院で、K-POPの経済効果などについて定期的に報告しているリュ・スンヒ研究員は、「文化産業は、創造の自由が確保される必要があり、ファンの個人情報収集といった活動も必要なため、政府には主導することのできない分野だ」と指摘した。リュ氏が出席していたエンタメ産業についての韓国政府主催の会議では、韓国大手エンタメ事業者から「政府の関与はできるだけ少ない方がいい」という声が目立ったといい、主に「国策」として行われている文化政策の事例としては、日本の「クールジャパン」政策が取り上げられることが多かったという。

SEVENTEEN のコンサート会場にて

K-POP最大の推進力、ファンダム

③では、96年にデビューしたH.O.TやSHINHWAなど、初期のK-POPアイドルのファンクラブ会長ら、代表的なファンたちを取材し、K-POPのファンダムの成り立ちとその団結力の理由を調べた。韓国の芸能事務所は、日本や米国などよりも著作権の管理に厳格ではなく、ファンがスターの写真などを使って「二次創作」をするといった活動を黙認していることが多い。その背景には韓国で「第一世代」のアイドルが生まれた際の経緯が影響していた。96年にH.O.Tがデビューした際、直後から事務所やレコード会社の思惑をはるかに超える規模で、熱狂的なファンダムが自然発生した。中学生の時にH.O.Tのファンになったという女性は、「毎日、登校前に好きなメンバーの家の前で待った。当時は300人くらいのファンが家で待っているのが普通だった」と語る。事務所側は対応が追い付かず、「ファンたちが勝手に行う活動を、事務所が追認していく形」が固定化していった。ファンが主体的に活動することが可能になり、独自のコミュニティも形成されていった。同時期に、ツイッターなど世界共通のSNSプラットフォームが普及したことで、こうしたファン文化は海外にも輸出されて、K-POPの「PR部隊」が各地に結成されていった。

こうした側面をみていくと、韓国エンタメの躍進の理由を、「国策の成果」と単純化するには無理があることがわかる。確かに良質なコンテンツを作るために国が行っている様々な政策は、特に中小企業がコンテンツを作る際の制作を下支えしている。だが、より広い市場を求めて独自に海外進出に取り組んだ芸能事務所などの個々の企業や、芸能事務所の練習生制度の中で実力を磨いた人材の分厚さ、そして自発的に無償のPR部隊となって世界中にコミュニティを広げるファンダムの存在が、エンタメの海外進出には大きく影響していた。主体、思惑の異なるこうした要素が折り重なって、世界的な韓流ブームは生まれたといえる。

プロフィール

もり　まゆみ
守 真弓

2004年に入社し、岐阜、仙台総局、政治部、シンガポール支局長を経て文化部記者。韓国のボーイズグループ、BTSの世界的な人気の理由を研究するうちにミイラ取りがミイラになり、熱烈ファンに。韓国のドラマや映画などにも耽溺する中、韓流エンタメの強さの理由を知りたくなり、留学を決意。韓国語習得に苦しみつつも、2021年4月から1年半にわたり、ソウルに滞在し、韓流エンタメについて研究した。

事業報告

2022年4月から12月までの事業について報告します。

❶ 青少年交流事業（JENESYS事業）

<オフライン交流>

●韓国大学生訪日団

「日韓社会・文化への相互理解促進～共通点、相違点及び今後の課題～」をテーマに、講義聴講、学校訪問、同世代交流などを通じて、対日理解を深めました。

19名 10月24日～30日	表敬（外務省、駐日韓国文化院）、交流（神田外語大学訪問、大学生訪韓団団員とのグループ別プロジェクト）、視察（高麗神社、浅川伯教・巧兄弟資料館、山梨県立リニア見学センター）など

ほか、9月に実施した「在韓公館選抜韓国青年訪日団（第1団）」及び、「大学生訪韓団」については、3ページで詳しく紹介しています。

<オンライン交流>

●日韓大学生交流

「日韓の未来と次世代交流」をテーマに、講義聴講や討論を通じ交流を行いました。

84名 （韓国側：42名、日本側42名）	全3回	5月28日、 6月4日・6月25日

●日韓学術文化交流プログラム（オンライン）

若手教育関係者を対象に、テーマ「日韓の教育課題」に関する講義、意見交換などを実施しました。

43名 （韓国側：19名、日本側24名）	全3回	10月22日、 10月29日・11月5日

●日韓高校生交流プログラム（オンライン）

両国事情理解のための講義、自国の魅力や学校生活の紹介、意見交換などを実施しました。

84名 （韓国側：40名、日本側44名）	全3回	10月22日、 10月29日・11月5日

❷ 基金創立40周年プレ企画「ポストコロナの日韓交流～新しい世界をめざして～」（交流支援制度）支援候補決定

ポストコロナを見据え、新たな交流プログラムやコロナ禍の経験を生かしてバージョンアップした事業を企画・実施する団体を募集した結果、14件の応募があり、うち6件を支援候補に決定しました。

「事業名」（実施団体名）

- **「もっと、ずっと、日本と韓国を好きになる」**（MOON）
- **「日韓大学生研修事業　in　釜山『VUCAの時代を共に生き抜くためのリーダーシップを高めよう』」**（一般財団法人静岡市国際交流協会）
- **「カフェ・コーヒー・コリア Beyond the Border 名古屋展」**（名古屋展実行委員会（事務局:SocialGalleryKYEUM））
- **「復活 日韓若者フォーラム」**（NPO法人ヒューマンフェローシップ）
- **「新時代の日韓共同課題フォーラム：日韓の外国人政策と多文化社会」**（韓日社会文化フォーラム（KJForum））
- **「日韓文化交流イベント【対馬から世界へ】」**（Ryu企画）

❸ 日韓文化交流基金賛助会員制度

公益財団法人日韓文化交流基金では、賛助会員制度を設けており、現在も多くのご支援を賜っています。心より感謝申し上げます。

賛助会員の皆さまからいただいた会費は、助成事業などを通じて日韓間の文化交流に活用しています。詳しくはウェブサイトにてご案内していますので、ご関心をお寄せくださいますと幸いです。

賛助会員リスト

（2022年度、五十音順、敬称略。カッコ内の数字は2口以上の口数）

特別会員（6名）

小野正昭（3）　鹿取克章（3）　金春美（3）
古賀信行（3）　中江新（5）　渡辺浩（3）

個人会員（50名）

青野正明　浅野豊美　阿部孝哉　安倍誠　飯島渉
石川武敏　磯崎典世　稲葉真岐子　林在圭
内田富夫（2）　及川俊男　大竹洋子　菅野修一
木畑洋一　木宮正史　小林直人　小針進（2）
高麗文康　坂井俊樹　阪田恭代　酒匂康裕
櫻井浩　佐藤俊行　鮫島章男（2）　澤岡泰子
宍戸秀行　白川豊　シン・ジュンヨン　高田加代子
田中正敬　塚本壮一　陽清学園 津谷正毅　都恩珍
中塚明　中山めぐみ　西澤豊　波田野節子
墨の美術館 濱﨑道子　日本民芸館館長 深澤直人
福原裕二　藤田昭造　藤本幸夫　堀泰三
前田二生　馬定延　松井貞夫（2）　實生泰介
茂木敏夫　余田幸夫　和田とも美

法人会員（1団体）

和光物産株式会社（5）

退任のご挨拶

日韓文化交流基金　顧問　**鮫島 章男**

尹炳世（ユン・ビョンセ）外交部長官表敬訪問（2016.9）

私は2008年11月以来、満14年の間、日韓文化交流基金会長として両国青少年交流、学術・文化交流など、様々な交流事業に携わってまいりました。

それ以前にも企業人として、韓国の方々と浅からぬご縁があったわけですが、文化という新しい分野において、韓国の多くの若者や有識者の方々、また韓国について学ぼうとし、あるいは日韓間の架け橋たらんとする多くの日本の方々とお会いすることが出来ました。

両国の間には多くの課題もありますが、私はこれらの方々との出会いを通じて、両国関係について明るい展望を抱いております。日本と韓国は隣国同士であり古からの長い交流の歴史があるからこそ、時に問題が生じることもあるのでしょう。個人の関係でも同様だと思います。

しかし、出会いの機会を今よりもさらに広げ、多くの両国国民が直接相手に触れ合う時、間接的な情報によってではなく、自らの体験により真の相互理解が深まっていくことと確信しています。

そのような出会いの機会をさらに広げ、また交流を進化させるため、日韓文化交流基金は今後も尽力してまいります。

これまでご指導ご鞭撻を賜りました皆様にあらためて御礼申し上げるとともに、日韓文化交流基金に対する一層のご支援をお願い申し上げ、退任のご挨拶といたします。

光州の錦湖（クムホ）高等学校サッカー部生徒たちと記念撮影（2013.9）

基金創立 30 周年記念　作文コンテスト入賞者表彰式にて入賞した高校生たちと（2014.2）

第 16 回日韓文化交流基金賞の授与式にて（2015.9）

④ 理事会・役員人事

①4月20日の令和4年度臨時評議員会にて、以下の人事が承認されました。
　就任／監　事：久保直生（公認会計士・税理士）
②6月28日の令和4年度定時評議員会にて、令和3年度の決算が承認されました。また、以下の人事が承認されました。
　就任／評議員：中島透（元ソウルジャパンクラブ理事長）
　　太田誠（日本経済団体連合会 21世紀政策研究所参与）
　　武井一（高校教員）
　　高麗文康（高麗神社宮司）
　　理　事：吉田光男（東京大学名誉教授・放送大学名誉教授）
　　西澤豊（新聞通信調査会理事長・元時事通信社社長）
　　久保田政一（日本経済団体連合会副会長・事務総長）
③8月8日の令和4年度第2回臨時評議員会及び第95回理事会にて、以下の人事が承認されました。
　就任／代表理事・理事長：鹿取克章（元駐インドネシア大使）
　　顧　問：小野正昭（当基金　前理事長）
④10月31日の令和4年度第3回臨時評議員会および第97回理事会にて、以下の人事が承認されました。
　就任／会　長：古賀信行（野村ホールディングス株式会社名誉顧問）
　　顧　問：鮫島章男（当基金　前会長）

退任のご挨拶

日韓文化交流基金　顧問　**小野 正昭**

この度日韓文化交流基金の理事長職を辞するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

外務省退官後、約10年の間、公私にわたり皆様の温かいご指導とご協力を賜り、大過なく勤め上げることができましたことを感謝申し上げます。

この10年を振り返るとき、様々な交流事業が思い出されます。とりわけ基金創立30周年事業や日韓国交正常化50周年事業では学生の作文コンテストや両国の芸術家による共演を含め、子どもから大人まで過去になく多数の方々が交流に参加してくださいました。

他方において様々な困難にも遭遇しました。例えば、この10年は東日本大震災の復興時期と重なり、福島原発の風評被害もあり東北地方と韓国との交流には苦労が伴いました。また韓国におけるMERS感染症の発生や痛ましいセウォル号事故により交流計画も少なからず影響を受けました。そして今回のコロナ感染症という未曽有の事態に直面し、２年半に亘るオフライン交流の中断を余儀なくされました。

ソウルにて訪日団参加 OB・OG たちと

しかし、職員一丸となってこれらの試練を乗り越えるべく、オンラインによる新たな交流の仕組みをいち早く構築して青少年交流や学術交流を中断することなく継続できたことは幸いでした。また、この間、日韓を取り巻く政治情勢はご承知の通り、慰安婦問題、朝鮮半島出身労働者問題、韓国軍レーザー照射問題、輸出規制問題などが生じ、両国メディアは「戦後最悪の日韓関係」と報じるまでになりました。

他方、困難な時期にこそ国民レベルの交流が重要であるとの両国政府首脳の発言には勇気づけられましたが、政治の逆風は一向に止むことなく、予算の減少に直面してきました。そこで、やむなく韓国外交部や教育部のカウンターパートの理解を得つつ予算を節約して交流の質の向上に努めました。さらに交流に参加した学生が構成するOB・OG会を日韓双方で自発的に設立していただき、OB・OGも現役の交流に参加することで交流の効果を高め幅を広げることを心掛けました。

最近の交流で注目すべきことは、メディアの偏向報道ぶりに疑問を感じた学生が、自分の目で真実を確認しようと参加していることです。交流の現場で学生たちは相手国の人々と出会い、真実を知り、感動し友好を深める、そして日韓関係の改善策を真剣に議論しています。東北地方の被災地を訪問した韓国男子大学生は「教わった知識やメディアの情報と現実は大きく違った。だからこそ文化交流が大事だという意見が多いが、個人的には限界があると思っている。なぜかと言えば、韓国の教育には絶対的な反日思想が含まれているし、メディアの反日報道もひどいからである。このような中でどうすれば改善できようか」と日韓関係の現状へ厳しい感想を述べています。さらに例を挙げれば、訪日して一般市民と交流した韓国女子大学生は「高齢者の方と歴史観や教育について述べ合う機会を持てたことが一番印象に残った。最悪の日韓関係と言われるが、むしろこの危機の時こそお互いを見つめ合い、偏見や溝を無くす好機である。日本では反韓感情のむき出しや『ボイコットコリア』もなく韓国文化を楽しんでいる。私たちは本当に自ら好んで『日本製不買運動や日本旅行ボイコット』をしているのだろうか？他人の視線が気になるからと言って、個人の言動が制限されているように感じるのならそれは違うのではないか」と述べています。このような若者の率直な声を両国のメディアも積極的に取り上げ、国民の相互信頼の増進に役立てていただきたいと思います。

最後になりますが、基金の役割は異文化交流にあります。立場や背景が異なる学生同士が交流し、臆することなく議論を交わせる場を提供することです。そこでは異文化を学び、不同意に同意し、互いを気遣い、互いのよりよい未来を願います。そこで培われた友情は、あらゆる分断を乗り越える力があります。その友情は長い目で見て平和の創造に大きく貢献すると確信しています。皆様のご理解とご支援をお願い申し上げ退任のご挨拶といたします。